

事実的知識と遂行的知識の区別

池吉琢磨・中山康雄
大阪大学大学院人間科学研究科

1. はじめに

知識とは一体何であるのかについて現在一般に広く受け入れられているもののひとつに、事実的知識（以下、**knowing-that**）と遂行的知識（以下、**knowing-how**）の区別がある。本発表では、20世紀の分析哲学にこの区別が登場した経緯を踏まえた上で、**knowing-how** を **knowing-that** の一種であるとする Stanley & Williamson (2001)の議論を批判的に検討する。我々の基本的な立場は、**knowing-how** とは **knowing-that** によっては汲みつくすことのできない知識の側面を表しており、それは **knowing-that** という知の様式に対するいわばアンチテーゼとして提起されたものだ、というものである。従って、「知識とはすべて **knowing-that** である」という主張さえ崩れれば、**knowing-that** と **knowing-how** の区別に固執する必要はない。両者を知識の分類として捉えることは、むしろ誤解なのである。

2. 歴史的経緯

knowing-that と **knowing-how** の区別の端緒となった議論としては G. Ryle の主著『心の概念』（Ryle(1949)）を挙げることが出来る。この中で Ryle(1949)は **knowing-that** の側面を強調する主知主義（Intellectualism）を徹底的に批判し、**knowing-that** では汲みつくせない知識の側面として **knowing-how** を取り上げた。その後、両者の区別の妥当性をめぐり幾つかの議論が提起されたが（たとえば Hartland-Swann(1955), Brown(1974)など）、**knowing-that** と **knowing-how** は知識の分類として広く受け入れられていった。しかしながら、それは両者の区別をめぐる哲学的議論が十分に尽くされたことを意味しない。というのも、本発表で取り上げる Stanley & Williamson (2001)やそれに対する反論（Rosefeldt(2004), Noë(2005)）の内容は、Ryle(1949)や Brown(1970)の議論の延長線上に位置づけるべきものだからである。

3. 遂行的知識は事実的知識の一種なのか？

Stanley & Williamson (2001)は、**knowing-that** と **knowing-how** には文法上の明確な差異は認められないとする Brown(1974)の議論を受けて、両者の区別の妥当性に疑問を投げかける。彼らによると、ある人が **knowing-how** を有するための必要十分条件は次のように解釈できる。

I s/w)「ある人がいかにしてFするかを知っている（knows how to F）」が真で

あるのは、発話されたコンテクストと関連した幾つかの方法 *w* について、「その人が、自分が *F* するための方法が *w* であることを知っている (knows that *w* is a way for him/her to *F*)」とき、そしてそのときに限る。

このとき、knowing-how を有するための必要十分条件は knowing-that によって示されることになるから、最終的に知識は knowing-that のみによって規定することが可能となる。

この議論に対して、Noë(2005)は彼らの議論が GOOP (善良で古風なオックスフォード哲学 Good Old Oxford Philosophy) であると批判する。彼によると、この GOOP の問題点は、哲学や認知科学における心の理論が人間の本性や心の本性に関心をもつのに対し、言語に関する考察——人々はどのように話すか——に GOOP は注意を向けるということにある。確かに知識の問題に言語学的なアプローチで取り組むことには何がしかの意味があるだろう。しかし、言語学的なアプローチのみで全ての問題が解決すると考えるのはあまりに短絡的と言うべきだろう。また、彼らの議論は主知主義に対して向けられたのと同じ批判を受けることになるが、彼らはそれに対して満足のいく応答ができていないように思われる。

4. 事実的知識と遂行的知識の関係をどのように考えるべきか

knowing-how が knowing-that の一種ではない (逆もまた然りである) とすると、我々は両者の関係を一体どのように捉えるべきだろうか。その問いは、自ずとより本質的な問い——そもそも知識とは一体何なのか?——に立ち戻ることを我々に求めるだろう。だが本発表の目的はこの問いに明確な答えを示すことにはない。ここで我々が指摘したいのは、knowing-that と knowing-how を知識の分類だと考えるべきではないということである。というのも、knowing-that として分類されてきた知識には knowing-how の側面が少なからず認められるからである。もし本発表の議論が正しければ、我々は knowing-that と knowing-how の関係性を踏まえた、新たな知識観を構築しなければならないだろう。

参考文献

- Brown, D.G. (1974) "Knowing How and Knowing That, What" in Wood, O.P. & Pitcher, G. (ed.) (1970) *Ryle*, Macmillan, pp. 213-248.
- Hartland-Swann, J. (1955) "The Logical Status of 'Knowing That'", *Analysis*, Vol. 16, pp. 111-115.
- Noë, A. (2005) "Against Intellectualism", *Analysis*, Vol. 65, pp. 278-290.
- Rosefeldt, T. (2004) "Is Knowing How Simply a Case of Knowing That ?", *Philosophical Investigations*, Vol. 27, pp.370-379.
- Ryle, G. (1949) *The Concept of Mind*, Hutchinson.
- Stanley, J. & Williamson, T. (2001) "Knowing How", *The Journal of Philosophy*, Vol. XCVIII, pp. 411-444.